

引っ越しの回数

中町 礼願

自分はこれまで何回引っ越したことだろう。今でこそ三十年同じところに住んではいるが、僅か一ヶ月で引っ越したこともある。

一番遠い記憶は線路の脇の本家の一面に建っていた六畳一間でのこと。夕方の暗くなりかけた縁側で母親が蕎麦を打っていた。そこへ本家の主が怒鳴り込んできた。何を怒っているのか全く理解できなかったが、母が頻りに謝っていた。

そんな怖い本家のあばら家から百五十メートルほど離れた新居に引っ越したのが最初だった。

五歳上の兄が学校帰りにその新居を通り過ぎて行こうとした。慌てて家を飛び出した母親が呼びとめている。つい、元のあばら家に帰ろうとした長男を大声で呼びとめたのは、母のプライドだったのかも知れない。

そんな母の矜持が詰まっている家を離れることになったのは大学入学のためだった。駅に見送りに来た母は必死に涙を堪えていた。なんせ千百キロの道のりを冬に向かつて

逆戻りして行くのだから、母親としては気がでなかったのだろう。当時は新幹線もなく特急「はつかり」から青函連絡船を乗り継いで函館本線「おおぞら」で札幌に着くのに二十時間以上要したのだ。そんな行程を息子はたった一人で旅立って行く。不憫で仕方なかったことだろう。

これが人生二度目の引っ越しだった。札幌に着くまでの車窓の風景は熊笹がどこまでも続く暗いもので、気持ちが悪く沈んでいった。到着間際の市街地も東京みたいに背が高くないので、随分辺境の地に辿り着いてしまった印象だった。

桜の散った内地の新緑の眩しさから雪のちらつくどんよりとした暗い冬の街に逆戻りしたのだから、どんなに心細かったことか。引っ越し先に届いている布団袋を解いても、これで寒さを凌げるとは到底思えない。

下宿先の大家さんに地元の電気屋さんを教えてもらい、早速石油ストーブと灯油を買って込んだ。六畳間を暖めるには十分とは言えない

かったが、手持ちの現金に余裕がある訳ではない。贅沢を言える身分ではなかった。それでも直ぐに打ち解けた下宿仲間たちの部屋は三畳だったり三畳半だったりで、小さな電気ストーブで暖を取っていた。それでも彼らの部屋は二階にあつて、自分の部屋より暖かった。狭さのせいだけではなかった。自分の住む一階の部屋は地の底から冷気が押し寄せて来る。それに大家の部屋と隣り合わせで会話するのも憚られたのである。

そんな訳で三回目の引っ越しは同じ下宿の二階への移動だった。親しくなった函館出身の同期生がゴールデンウィークを前に退学して、二階の端っこが空き室となった。既に嫌いになりかけていた口うるさい大家に直談判して二階の空き室を勝ち取った。家賃は千円高くなったものの大家の部屋からは一番遠い。これは天と地ほどの開きがあった。以来私の部屋が仲間たちの溜まり場となったのである。そこでいつものように皆で話し込んでいると札幌の夜明けは早かった。決ま

って大家の悪口で盛り上がると結論は二年になる時にはこのゴキブリ下宿を脱出しよう。それで一致団結して、引越しを決めた。そこで四回目の引越しは困難を極めた。三学期の試験が終わると早速部屋探しを始めた。

二月の札幌は酷寒である。国道三十六号線沿いを豊平橋から美園、月寒に向かってひたすら歩いた。不動産屋さんの窓ガラスに貼り付いた空き室を見ては溜息をつき、次の不動産屋を探す。同居を約束した一つ年上の同級生は岩手の出身で、私よりはずっと寒さに慣れていた。その彼も次第に無口になり、足の爪先の濡れ具合を気にしている。もう一軒確認したら今日は諦めようと相談した。その最後の不動産屋さんは我々の消耗度を見かねて、温かいミルクを恵んでくれた。そこで決めたのが今でいうところの2DKで家賃は二万六千円だった。

しかし、そこも長くは続かなかった。同居友達の父親が病に倒れ、里帰りしてしまったのだ。およそ三週間の一人暮らしで気楽さを覚えてしまった自分から同居の解消を申し出たのだ。ここでの生活は僅か二か月であっ

た。そう言えばそのころにS先生を通じてロシア語学科の二学年先輩に出会えたのだった。国立市出身のM先輩は体の細さに反して太くて男らしい声が印象的だった。

次の引越しはリヤカーを借りて行った。二人が探した引越し先は月寒のアパートから一キロも離れていなかった。岩手の彼はこの引越し先で生涯の伴侶となる女性を探し当てたのだから、私のわがままも役に立ったと言えなくもないのだが。

しかし自分の方は下の住人がいけなかった。水道業を生業とする世帯主が大酒飲みの酒乱だったのだ。今では社会問題となっているDV男で、毎晩のように奥さんに暴力を振るっていた。ここでは二年先輩のTさんから預かったシヤム猫に逃げられてしまい、その負い目で一ヶ月ほどその先輩に部屋を貸した覚えがある。お金に困っていた先輩は私の部屋を片っ端からひっくり返して、本のページに挟んであった古い百円札や万が一のためにと保管してあったお札さえ使ってしまったのだ。本人の名誉のために記すが、これらのお金は東京に帰省した先輩が現金書留で返してくれたのだが。

結局この五回目の引越し先は一年我慢して出ることになったのだ。そして六度目の住まいは国道三十六号線から月寒公園に下ったところだった。この大家さんはご主人が市会議員で随分太っ腹な面があった。夏休みで帰省の挨拶に行くと、二条市場に一緒に行って手土産の新巻鮭を買ってくれたりもした。その居心地の良さもあって、卒業までここに落ち着いた。甘酸っぱいエピソードもこの部屋にはいっぱい詰まっている。

かくして卒業を迎え、荷物を一旦実家に引き上げたのが七度目の引越しと言えようか。次は就職先が探してくれた社宅への引越した。千葉県船橋市で津田沼駅から歩いて十分ほどのトイレ、水道が共同のアパートだった。言ってみれば学生より酷い扱いで、その劣悪さに総務課長を恨んだ記憶がある。本社が築地駅から三分ほどの新富町で、製造工場が千葉の外房線菅田駅だったこともあり、中間に位置する津田沼駅周辺で借り上げアパートを調達したという訳だ。安月給だったので三年以上我慢した。

九度目の引越しは結婚を決めた妻の家から近い等々力溪谷の直ぐ近くだった。大雨

が降ると矢沢川が氾濫し、遠回りをしないと帰れない。そんな位置にあり、いつも天気が気になって仕方なかった。

それから住宅公団の抽選に当たり、埼玉の草加団地に引っ越した十回目。転勤で大阪の江之子島に移ったのが十一回目。大阪の文化に馴染めず会社を辞めて草加に戻ったのが十二回目。

草加に戻って妻の実家を建て替えようと考えたのは自分である。住まいの雑誌を買い漁り、住宅展示場を休みの度に見て回った。世田谷区で家を建てるには何千万ものお金が必要だった。そこで捻り出したのがアパート兼用二世帯住宅だったのだ。家賃収入で妻の母親の生計を支え、自分の持ち分のローンにあてた。素人ながら引いた図面がほぼ採用されたのは実に感激であった。ローンの返済計画も理に適っていると絶賛された。以来毎年のように玉川税務署に青色申告の指導を受け、もう来なくてよいと言われるまで通い詰めた。

こうして自分の引っ越しは十三度で今のところ落ち着いている。これが多いのか少ないのか判断材料がないが、自分としてはその

土地土地に一期一会があり、どこにも郷愁を覚えるのである。

今の住まいが終の棲家になるであろうことは予想できるが、願わくはもう一つくらい晴耕雨読を楽しめるセカンドハウスが欲しいものである。

親しい友人の中には東京を引き払って沖繩に永住を決めた者もいる。それも一つの生き方だが、この歳になって新たな環境に馴染めるエネルギーが残っているか、甚だ自信がない。ならば気まぐれに訪れることができるセカンドハウスなら良いのではないか。幸いにして設立した新会社は世田谷の自宅から百キロほど離れた群馬県にある。妙義山や軽井沢の街も一時間あれば行けるところだ。やっている仕事は景観工法と言われる手法に利用される特殊モルタル資材を製造販売している。リフォーム業界に近いところだ。古民家を探して自分でリフォームするのもいいかも知れない。やがて一時間半の通勤が苦痛になる日が来るだろう。そんな時のために今から十四回目のミニ引っ越し先を探すのが夢である。

四十年近く連れ添っている妻は田舎暮ら

しは無理だという。

「あなたは蚊に刺されるのが嫌いだし、カメラシンの大量発生で眠れなかったのを覚えているでしょう。そんな人が田舎暮らしできる訳ないじゃん」と言う。

最近『ボツンと一軒家』とか『人生の楽園』という番組をみるが多くなった。田舎への憧れはいいけれど、見ると住むとは大違いなのよ……。妻の言い分は十分理解しているつもりだ。

このところ世田谷ナンバーで地方のスーパーに行くとか胡散臭そうな目が見え隠れする。自粛が叫ばれている中で、何やってんだってなもんである。これも自分が勝手に思い込んでいるだけかも知れないのだが、新しい生き方にもそれなりに制約はあるものだ。

旅行者気分であらうと泊まりに行くのは迷惑なのかも知れない。それを分かたうえで、セカンドハウスを探す夢は捨てきれない。果たして自分の十四回目の引っ越しは実現するであろうか。実現すれば切りのいい十五回目天国となる。

(了)